

木下道郎さんのドッグハウスを読んでみる

建築計画評価委員会が建築家の住宅を記述する3回目は、木下道郎氏の自邸「ドッグハウス」である。2005年4月に竣工したこの家には、木下道郎氏ご夫婦が大学生と高校生の2人の子どもと暮らす。三鷹市下連雀は、古き住宅がゆったりとした時間とともに、それぞれの生きた時間を個性として刻みながら建ち並んでいる場所である。ドッグハウスは、そんな第一種低層住居専用地域にあった家を改築して生まれた。11m×18mの敷地いっぱいに、南と北側の隣地の境界に木目が透ける薄黒の壁を立ち上げて、二つの空間が東西に長い外部デッキを挟んでいる。北側の外壁はガルスパンというガイバリウム貼で、どちらの隣地に対してもその壁はほどよく低く、全体として住宅地の景観になじんでいる。

木下邸の魅力を来訪者として目一杯に楽しんだその記憶をたどりながら、そして木下氏から送っていただい

た1/100のザックリしたプランを見ながら、「木下邸を読んでみる」ことになった。その名前から犬小屋のように耳を立てた部屋が並んだ住宅に向かってみると、木下氏が考えそして空間として解いたいくつかの仕組みが見えてくる。

| 住む広場

個人の部屋四つは大きさが全く同じで、デッキに向かって2mの高さの低い軒が続く姿は、平入りの町家が住宅の中に街の景観をつくっているようにも見える。家族のひとり一人が個人の空間を持ちながら、デッキに向かって均等にそれぞれの部屋を開けている。大きくゆったりと傾斜した屋根によって切り取ることができる空は広く、家族全体が住むための広場を持つ気持ちのいい住宅である。シマトネリコが若葉をつけているデッキの東端に座ると、個室も家族室も全部に目を向ける

ことができるほどに、開いた住宅がそこにある。

間仕切りを収納する二重になった壁が、住宅の内部と外部との境をつくる。南側個室の間仕切りはすべて西に向かって開くように設計されているのは、家族室の方向に個室が向かう仕組みである。北側キッチンの間仕切りは逆に個室に向かって東に開き、家族室と個室との相互浸透的な空間がそこに織り込まれている。しかし、四つの個室と同じ西の方向に間仕切りを開けながら、東のデッキ端部に近い洗濯室とバスでは、この間仕切りが空間を逆に閉じる仕掛けともなっている。

| 間の深さ

玄関に入るといくつかの小さな部屋が縦に並ぶ。玄関の収納、トイレ、数多くのCDコレクションの棚が、リビングに続く廊下に縦に重ねられている。外から住宅内に入る時には、重なっ



写真1 | 「アッラベルト」の専用椅子でくつろぐラブラドルの「フク」

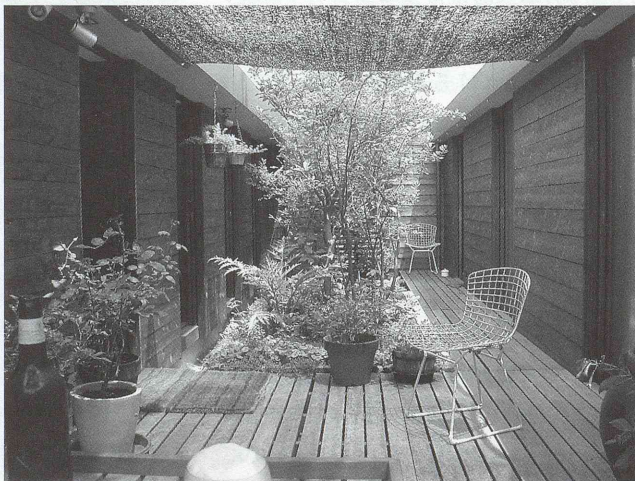


写真2 | 日差しが強い休日には日よけとビールが登場します

きのした・みちお

1951年兵庫県生まれ／1975年横浜国立大学建築学科卒業／1978年同大学院修士課程を経て共同でワークショップ設立／1995年木下道郎／ワークショップ設立／2004年～日本大学生産工学部非常勤講師、現在に至る

にしむら・しんや

1954年生まれ／1978年東京大学建築学科卒業／1985年同大学院博士課程単位修得満期退学／工学博士／1991年学会奨励賞、2009年学会教育賞受賞ほか／2008年～新潟大学副学長、現在に至る

た空間の襞をすり抜けて、デッキの緑を見ながら白いソファが置かれているリビングに至る。短い中に空間の層をギュッと押したたんで住宅の奥と深さをつくり出している。

この玄関を含む北側の棟には家族室（リビングとダイニング）があり、南側の棟に風呂・洗濯室・家族4人の個室が配置されている。この並びは、デッキに植栽のスペースを玄関の廊下に沿って空けたことで、決まったように思える。植栽のスペースは玄関からリビングの途中、ちょうど南側の長男の部屋の壁のところまでで、この植栽スペースの脇に狭い廊下が長女、夫人室に伸びている。これは、玄関、家族室、風呂、洗濯室、木下氏、長男、長女、妻の部屋がこの順で左回りに螺旋を描くように並び、女性の部屋を住宅の奥に位置付けるように計画したものである。植栽のデザインに部屋の並びと空間の奥行きをきめる力を持たせた平面構成は巧みだ。

住のたね

木下さんが「お風呂を家族室側にすればよかったかもしれない」と漏らしているのは、高齢になった時の使い方を考えてのことである。風呂は個室につくよりもリビングやダイニングといった家族の集まりの部屋にあることを考えている。しかし、キッチンとバスを結ぶ中庭に屋根を付けて内部化することや、子どもたちの独立後に子ども室を挟んで両脇にあるご夫婦の部屋が、その2室をそれぞれのユーティリティールームに使うこと、ご夫婦が別

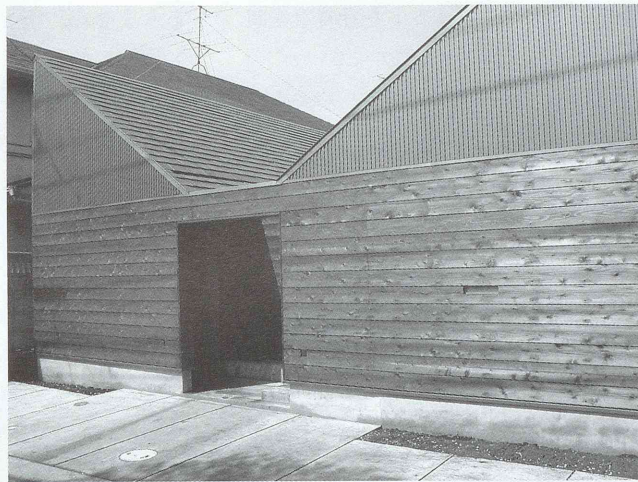


写真3 | 竣工直後の道路側外観。左が個人棟で右が家族棟

寝から同寝に変化する時にこの4つの部屋が一体化されること等のさまざまな変化が可能である。ご自身がその時々々の年齢にあった空間へと自邸を変化させていくことを想像させる。それほどに、この家は住まいの種のような魅力ある建築である。

自邸の設計に対峙して、「やりたいことを整理できない停滞の期間」も抱えながら、木下氏が7年かけたこの設計には、たくさんの思いとアイディアと空間の仕掛けが込められている。私が読めるのは大きな勘違いを含めてほんの少しでしかない。木下氏はシマトネリコの成長や花の開花を愛でるように、この家が住み手の変化に対応して成長していく様子も示すことができる。自邸の設計に込められたこの大きな楽しみを持ち続けられるのは優れた建築家の特権である。

設計メモ

木下道郎

2005年4月の竣工以来50カ月が経過しました。竣工までのことはいろいろなところで文章にしているので今回は竣工後実際に生活が始まってからのことを書いてみたいと思います。

この家の最大の特徴は家全体が屋外空間によって家族棟と個人棟の二つに完全に分断されているという常ならぬ平面構成にあります。四つの個室はこの囲われた屋外空間からのみ出入りするようになっているほか、洗面所、浴室、居間、食事室、厨房もここに開いています。単に中庭とかデッキとかいう言葉では表しきれない「外の廊下」とでも「家族の広場」とでも言えそうな独特の空間に、よく遊びに来る隣人が「アッラベルト」all'a perttoと名前を付けてくれました。イタリア語で「屋根のない」という意味だそうです。ただ外部空間が身近にあるというだけでなく、家族の結びの領域が実体として認識されやすくなっているという空間

構成が「アッラペルト」を独特な空間にしているようです。「アッラペルト」に焦点をあわせて竣工後のわが家の成長の様子を書いてみます。

身近な外部空間としての「アッラペルト」

竣工写真を撮った時点では植えられていなかった植物が竣工直後の夏に植えられ、シマトネリコを成長頭にジューンベリー、チョークベリー、ブルーベリーなどが著しく成長しました。下草や鉢植えのバラなども年々数を増やし、春から秋にかけては緑が溢れています。一年目に枯れてしまっただけでなく、そこに飛来する蝶や虫、彼らのタマゴや幼虫などかなり細かいモノにまで目がいくようになり、季節の移り変わりを細やかに楽しむことができるようになりました。

普段は私は裸足で、人によってはサンダルで屋内屋外を行き来しています。雨や雪の時は出入りのところで履き替える必要があるので足ふきマットが随所に出現します。よく話題になる「家の中で傘」は一度もやっていません。傘がほんとうに必要なほどの距離がないからでしょう。猛烈な雨は永くは続かないので少し待つこととなります。その手の大雨は年に1、2回しか

ありません。積もるような雪は4冬で2、3回。除雪シャベルを用意しておいて朝一番に雪かきをして通路を確保しました。あえて雪止めはつけなかったもので屋根に積もった雪の滑落は劇的です。天気の変化には敏感になりました。天気予報も頼りにはしていますが「アッラペルト」から伝わってくる気配でおおかたの予測はできるようになっています。「アッラペルト」は東西に細長いので太陽の動きがよくわかります。太陽が一日中さまざまな方向から差し込んでくるので「アッラペルト」の雰囲気は劇的に変化します。生活は太陽中心にかなり早起きに変わりました。夜中にトイレに行くこともあります。冬ならば外は寒いので、いい歳になってきた私などにはからだによくないようですが、深夜の夜空の下の夜気もまた格別です。太陽、天候、季節。自然の細やかな動きに敏感な暮らしを楽しんでいます。

幸か不幸か扉がすべて引き戸なので犬も猫もいつでも好きな時に屋外に出ることができます。勝手気ままに出入りを繰り返し「アッラペルト」でごろごろと寝そべっている彼らの姿を見るとわが家を一番享受しているのは動物たちのような気もしてきます。

家族の結びの領域としての「アッラペルト」

家族構成はパピヨンという小さな犬が竣工の年に「群れ」に加わったほかは、猫も含めて変わりがありません。大人は少し歳をとっただけですが息子は高校生から大学生、娘は小学生から

高校生へと大きく成長しました。4人それぞれの個室の扉は型板ガラスの框戸ですので部屋の中の気配がほどよく家族棟のほうに伝わってきます。個室は収納を含めて4畳半と一日中籠っているのに十分な広さではないということもあり「アッラペルト」への出入りは頻繁です。各個人の独立性は重んじながらも賑やかな楽しい暮らし、という狙いどおりになっています。わが家ができてからの最大の変化はなんといっても来客の飛躍的増加でしょう。雑誌やテレビなど取材での来客だけではなく、友人・隣人など多くの人がわが家に遊びに来てくれました。たいした広さではない家族棟が「アッラペルト」と連続することで予想以上に多くの人を許容する空間となります。普段の暮らしと人がたくさん集まる時とでは空間に求められるものが異なっています。そうたびたびあるわけではないパーティのような機会に足りなくなる機能を「アッラペルト」が補っているように思います。大人たちの集いであっても「アッラペルト」に姿を現した子どもたちは自然に集まりに顔を出すことになって何かしらの出会いが生まれます。ここでのさまざまな出会いが私たち家族の暮らしを楽しくしてくれているのだと思います。

概要

所在地：東京都三鷹市
敷地面積：195.26㎡ 延床面積 94.66㎡
構造：木造
階数：地上1階
竣工：2005年4月
設計者：木下道郎／ワークショップ
施工者：平野建設